

するあるのみ。

辨天島驛と言つても小さい風流な停車場。此の風光を車中の旅人に一寸見せんとて設けたものであらう、松風濤聲と相和する島には吉祥天女の一小祠がある、之れ即ち辨天島の名に負ふ所以である。

夏をとへば引佐細江や秋の聲

紹 巴

此の向ふは舞坂驛、舞坂一に前坂ともしるし昔は舞澤と呼べる由、光行記に『舞坂の原といふ所にきにけり、北南は渺々と遙かにして西は海の渚近し錦花繡草のたぐひはいとも見えす、白き沙のみありて雪のつもれるに似たり、其間に松たえく生ひわたりて鹽風梢に音づれ』

と記せる有様は今も昔の如く眺めらる、町は人口約三千を有し南は海、北は湖、海のあけぼの、山の夕ぐれ銷夏には最も適して居る。

これより瀛松驛へは陸路約七里、汽車は六哩五、此地古は所謂引馬の里と稱

し、今川氏領有の頃は繁華なりしも、中ごろ戦亂の爲めに衰へ、今川氏滅亡後徳川家康居を岡崎より移し、名を濱松と更めてより次第に繁盛に赴き維新前迄は井上氏六萬石の城下として榮えた所、今は人口三萬に近く商業の盛なること東海道中殆ど其比なく、日本樂器製造會社ありて、ピアノ、オルガンを製造し、帝國製帽會社ありて外國品の輸入を防ぎ、日本形染會社ありて精巧なる技術を究め、其他紋織會社、蒔繪漆工場、濱名納豆、曳馬の萩筆等名産續々として旅客を喜ばせて居る。

官公衙としては静岡地方裁判所支部、御料局出張所、濱名郡役所、測候所、警察署、濱名分監、學校としては縣立濱松中學、商業學校、高等女學校等がある、又町の北端に濱松城址あり、天主臺に上つて南方を望めば、遠州灘七十五里渺茫として際涯を見ず、北方を願望すれば三方ヶ原の古戰場を指すが如く、犀ヶ崖は三方ヶ原の戦に、家康偽道を設けて信玄の

軍を破れる所、颯々の松は風流將軍足利義教の吟賞に入つて名が賣れ、常  
寒山は濱松第一の勝區として名高く、何れも行客の吟斷を逼る所のみであ  
る。

濱松より四哩二にして天龍川驛、驛の北方河岸に中野町あり、此處は京へ  
も六十里、江戸へも六十里の振り分けの所なれば此の名ある由、汽車は天  
龍川の鐵橋を渡る、天龍川の水源は信州諏訪の湖にして、川は遠州に來り  
て幾流にも岐れ、其内東の流を大天龍、西の流を小天龍と稱す、建武の昔  
新田義貞、箱根足柄の戦に利なくして此處を落ち延びけるに、野心を抱け  
るものひそかに浮橋の桁を切つて捨てたれば、義貞舟田入道と手を取組み  
ゆらりと飛び越えたるさま凡夫のわざにあらずと見えけりと太平記にある  
今も街道筋には長橋を架してある。

天龍川の鐵橋を打ち渡つて磐田郡中泉驛に着く、此處は人口六千餘の町に

して古へ國府の在りし處、當町の北十六町餘にして見附町あり、街道筋の  
一驛にして人口約八千、徳川時代には饅飩、蕎麥切、鼈の名物もあつた由  
なれど今は鷹坂山のほとりなる三本松さへ振り向いて見る者もない、只昔  
右大將頼朝が金札の鶴を放つたといふ舊蹟は、町の北十町餘の里であるこ  
土地自慢の話に残つて居るのみ。

汽車は之れより平坦の地を少しく東北に馳せて袋井驛に着いた、此の地四  
面丘陵を以て圍まれ、水甚だ清く、恰も袋の中の井の如しといふ事、頗  
る振つた地名が興へられた、古來鎮火の功德を以て知られたる可睡齋三尺  
坊は停車場の北三十町程の處にある、應永十四年天開和尚、此の地に草庵  
を結び、五世の孫太路に至り佛刹を營んで東陽軒と號したが、十一世等腦  
和尚の代に可睡齋と改稱したのである、其後明治六年秋葉山より三尺坊威  
徳大権現を遷してから、賽者陸續として今日の盛觀を呈するに至つた、附

近に法開山、油山等の勝地がある。

袋井より幾何もなくして小笠郡に入る、掛川驛は本郡の殆ど中央に位し鐵道は袋井より五哩五、汽車は十六分にして達する、當町は人口約八千、郡役所、區裁判所及び縣立中學校等ありて郡内第一の都會である、秋葉山へ參詣せんとする人は此處で下車し、北へ九里も行かねばならぬ、其の秋葉道路筋當町の北端に掛川の古城址がある、今川氏眞の築く處、永録十二年城陥つて彼は一族を率て小田原に退却するや、石川日向守の手に落ち後山内一豊、松平定勝等を経て、明治維新前までは太田氏五萬三千石の居城であつた、城湟の構ひの跡歴然として昔を偲ばせる、町の物産としては萬布がある。

掛川驛より鐵道は東南へ、街道は東北へと少しく相離れる、そして堀之内驛を経て榛原郡金谷驛に至つて又再び相合する、街道筋を行けば巖餅で名高

い日坂の東をつま先さ上りに上つて小夜の中山である。

甲斐がねをさやにも見しかけられなく

よこほりふせるさやの中山

と古今集に詠まれ、又夜泣石の傳説を以て昔く世に知られたる名所である  
子育觀音の久延寺も今は無住で荒れ果てゝ居る由、膝栗毛の彌次郎兵衛と喜多八は

此寺に無間の鐘もつきなくし

今は晦日に啞やつくらん

とやつた、此のやうな歌を詠む呑氣な心がせめて半分もあつたなら、あはれ紅葩も晦日の頭痛をやむまいものを、二十世紀の神經質の男は如何に勇氣を奮ひ起しても、平然として啞はつけない、古人此處を通過して『北は澤山にて、松杉嵐烈しく、南は野山にて秋の花露しげし』など書いてある

が文明の旅行は物質的で、實利的で何でも金…金…秋の花露しげしなご、  
 言つては居られない旅行である、やがて此の山を下れば菊川の里、橋を渡  
 つて左へ四五町、矮松まばらなる丘の中腹に、中御門中納言宗行卿の碑が  
 ある、承久の昔此の卿罪あつて東へ下されけるが偶此の宿にやどりて  
 昔南陽縣菊水汲下流而延齡  
 今東海道菊川宿西岸而終命  
 と宿の柱に書かれ、元弘の昔、藤原俊基卿が關東へ下されける時には、  
 それを追想して

心にしへも かつるためしを 菊川の

同じ流れに 身をやしづめん

と詠まれ、何れも哀れを後世に傳へた、紅葩は東關紀行の註釋白樂天の

谷水洗花汲下流而得上壽三十餘家。

地脈和味滄日精駐二年顏者五百箇歲  
 といふ所を讀んで居る中に汽車は隧道に馳せ入つた、此の隧道の上には天  
 正年間武田、徳川の兩軍が戦つた牧野の城址がある、武田信豊、馬場尙房  
 の築く所にして、天正元年松平忠次の爲めに陥られ後數年遂に廢城とな  
 った、草萊離々たる處に當年の滄渠、天守臺等の跡とも思しきもの僅かに  
 認められ、之より南は三方ヶ原に亞ぐの平野牧野ヶ原である。

14、駿河國

島田驛…大井川…朝顔日記…島田町…藤枝驛…蓮生寺…田中の城址  
 …志太温泉…焼津驛…焼津神社…宇津の山邊…蘿徑記…静岡驛…駿  
 府城…静岡市…市内の官衛學校…賤機山…淺間神社…知名の神社佛  
 閣…柴屋軒の跡…由井正雪の墓…木枯しの森…安倍河原…久能山…  
 古の山館野亭の泊り…現代人たるを悲しむ…江尻驛…清水港…龍華

寺…清見瀉の風光…高山樗牛と齋藤野の人…東海の絶勝三保の松原  
 …三穗神社…天女霓裳羽衣の舞…謠曲羽衣…興津驛…清見寺…清見  
 が關址…清見瀉一帯の風光…薩陀峠…蒲原驛…淨瑠璃姫の墓…蒲原  
 町…吹上の濱…岩淵驛…身延山の賽路…富士川…角倉了以…鈴川驛  
 吉原町…天の香久山…田子の浦…原驛…浮島ヶ原…須戸の湖…松蔭  
 寺…白隠禪師…禪師の遺著…原驛の風光…天地正大の氣…沼津驛…  
 沼津港…三枚橋城址…千本の松原…車返しの坂…海水浴場(伊豆の  
 一部及び相模の一部)…三島驛…三島町…富士の溶雪水…三島神社  
 …箱根山…箱根の地理…箱根の關所…蘆の湖…湖畔の風景…箱根神  
 社…箱根諸温泉…阿彌陀寺…御殿場驛…裾野…淺間神社…裾野巡り  
 …懷舊…小山驛…足柄山…新羅三郎義光…山北驛  
 汽車はやがて海道一の急流大井川を渡つて駿河國志太郡島田驛に着いた、

大井川は劇曲『朝顔日記』の材料となりて

「街道一の大井川、篠を亂してふる雨に打交りなるはたゞ神、漲り落る水  
 音は物すごとくも亦すさまじき、夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も、  
 厭はぬ深雪が、こけつ轉びつやう／＼爰に川の側『ノウ…川越し達  
 ……』  
 と頗る面白く書かれ芭蕉の翁は

さみだれの雲吹きおとせ大井川

と詠み、徳川時代には旅人が蓮臺や人の肩に乗つて越した名所である、抑  
 も此の川は其の源を甲信の境なる白根山に發し、峽谷の間を南流して駿遠  
 の國界を奔下し、途中關の澤、寸又等の諸水を併せ榛原郡吉田村、志太郡  
 吉永村の間に至つて始めて海に入る、延長凡そ四十七里、沿岸は斷崖削立  
 して平地に乏しい、此の川平時は水涵れて徒歩にても渉れるが、一旦豪雨

の至るあれば河水忽ちにして汎濫し、兩岸相辨せず水勢鞏轄として恰も朝顔日記に書かれてある通りの物すとき光景を呈する、それで若しもこんな時に出會へば、昔の旅人は徒らに島田、金谷の宿に足を止めたが、今日は汽車の窓から見物しつゝ通られる。

島田の町は停車場の北にある、人口一萬二千餘の市街にして、島田銀行、綿糸紡績所等ありて可なり繁華の都會である、太平記には「島田藤枝にかゝり岡部の眞葛うら枯れて」と書いてあるが、其の藤枝の町、岡部の町は之れより順次東北に當る、汽車は一直線に走りて即ち藤枝驛に至る、町は停車場より北約二十町の處にあり、人口一萬餘、其の繁華島田町と相伯仲して居る、郡衙、區裁判所、警察署、藤枝銀行等が各町に散在し、字本町には熊谷直實の創建にかゝる蓮生寺がある、又町の南端田園打ち續く中に田中の城址がある、天正八年甲斐の依田信蕃之を築き、同年徳川の軍と戦破

れて甲斐に逃れ、後徳川氏の有となり文化年中途に廢城となつた、猶停車場より藤枝町に至る途上青島村に志太温泉がある。

藤枝より幾何もなくして日本武尊東征の事蹟を以て知らるゝ焼津驛、縣社焼津神社は即ち尊を祀れる社にして、社前の道路海に面したる所約二十町櫻楓の類を植ゑ連ねてある、此處より烟波を隔て、遙かに伊豆の雪見崎を望む、汽車は海岸を縫ひて静岡に向ふ、途上左手に當て一帶の山脈蜿蜒として我が行く方を遮るが如きは伊勢物語に「するがなる、宇津の山へのうつゝ、にも、夢にも人に逢ぬなりけり」とある宇津の山にして、峠の西に一碑あり、文を刻して羅徑記と題す、麓は即ち在原の業平が古蹟、鳶の細道である、之より隧道二つを過ぎ八哩にして汽車は賑かな静岡の停車場に着いた。静岡は中世府中と稱して國府を置き、又家康老を養ふに至りてより駿府と稱したる處にて、永録、元龜の頃は今川氏の城地であつた、然るに今川氏

滅るや武田晴信に歸し、後天正十八年徳川家康、濱松より遷つて此處に居り、江戸幕府を開いて後再び此の地に退き、老後猶天下の大事を截斷した處である、家康の薨去後は頼宣、忠長等相次ぎて居城せしも、寛永九年忠長は罪あつて除封せられ、爾來只城代を置いて治めさせた、維新の始め今の貴族院議長徳川家達、七十萬石を以て此の地に封せられ、後幾何もなく大政奉還となつた。

人口五萬東海道中屈指の大都會にして、市の中央駿府城址の本丸には歩兵第三十四聯隊を置かれ、外廓の内には師範學校、商業學校、静岡縣廳等を始め、各種の學校官衙がある、壯大なる和風造りの静岡御用邸は追手町に、各種の銀行會社等は新通町、呉服町に、旅館料理店、商家等相連れるは紺屋町、兩替町、妓樓軒を列ねて晝夜弦歌を絶たざるは安倍川町である。

賤機山は市の北端に當り、驛よりは約十六町、青葉ヶ岡とも稱す、山頂に今川義元の築ける古城址がある、松嵐寒しと雖頂に上りて小手打ちかざせば満目何の遮るものもなく、脚下には静岡の全市街を瞰下し、西には安倍川帯の如く流れ、北には芙蓉千古の雪を仰ぎ、南は優雅なる長浦の邊より沖は遙かに茫々萬里の大洋を望むことが出来る、南麓には祠殿の華麗を以て日光と共に日本神社の二壯觀なりと貝原益軒が賞揚せし淺間神社がある、樓門、舞殿、舞殿の奥なる拜殿、三重閣は其の欄間、棟宇を飾る神仙龍鳳の彫刻、金碧の光燦爛として最も精彩巧妙を極めてある、本社殿、神部神社は總社の稱にして其の創建は遠く崇神天皇の御宇にかゝり、大己貴命を祀つたものであるが、淺間神社は後年富士淺間神社の木花咲耶姫命を勧請して此處に新宮となしたものである、境内は今静岡公園とせられ、櫻花彩雲の候、紅葉如花の候、人も亦雲の如くに集る。

誰がためそ しつはた山の 長き日に

聲のあや織る 春のうぐひす

今朝見れば かすみの衣 おりかけて

しつはた山に 秋は來にけり

後法性寺入道

知 家

停車場の西、下魚町なる寶台院は、家康の妾寶台院を葬れる寺にして龍泉寺と號し、堂宇頗る宏壯、人宿町なる華陽院は家康の祖母、華陽院を葬れる所にして家康、讀書の師眞譽上人の開基、淺間神社の東北三四町の地にある、臨濟寺は禪宗臨濟派の總本山にして、天文年間今川義元の創立にかゝり、其の大書院の一隅四疊半は、家康嘗つて今川氏に質たりし時の寓所にして、彼が大原和尙に就いて學修せしも亦此處である。

此の外一華堂、寶泰寺、報身寺等徳川氏に縁故ある佛寺市内に散在し、彼の有名なる連歌師宗長の住せし柴屋軒の舊跡は、安倍川を隔て、丸子の宿

の北六町餘字泉谷にありて、此處に天柱山柴屋寺あり、寺の東方に吐月峰あり、其の北に峙つて天柱山とす、宗長は當國島田驛の人にして、境内に其の碑及び木像がある、此の他慶安の首謀者由井正雪の墓、赤穂の遺士かしく坊の墓、森はこがらしの森と枕の草紙に書かれし木枯しの森、家康が石合戦を見物せし安倍河原、建武二年新田義貞が北條の兵を敗りし手越の古戰場等市の四周に散在して居る。

住みわびぬ うつらふ人の秋のいろに

身を風の 森の下つゆ

定家卿

家康瘞骨の地なる久能山は市の東二里半、有度の海濱に沿ひて隆起せる一連岡にして、山は甚だ高からずと雖、眺 矚 頗る雄大である、元和三年、家康の遺骸を山上に埋めて一祠を建てたが、後年之を野州日光に移すに及びても、猶彼是共に東照宮と稱して世人の多く參詣する處である。



破笠弊衣、急がはしき旅人の紅葩は、尋ね飽かぬ静岡の名所に名残を惜しんで、又再び東に向つて出發した、紅葩毎に思ふ、何故に我は不便なる、不文明なる、未開なる五六百年も昔の時代に生れざりしやと……そして名利、權勢に望みをかけずして、或は山館野亭の夜の泊り、或は海邊水流の幽かなる砌に、醇朴なる太古ながらの土の匂ひを嗅ぎ、水の流を眺めたかつたと……けれども之れ唯一場の思想に過ぎず、靜かに我身を顧みれば、果し眼になつて今日の生存を意義あらしめんが爲めに働かねばならぬ多忙なる現代の一人である、されど詩興油然而として湧き來るや、既に心は觀念界に飛んで我が足の踏む土の世界を忘れる。

教へ給はゞ天よわれは、風のまに／＼昇り行きて、御言語らひ御歌うたひ、かくて熟睡を雲の上に、これより汽車は東北に進んで江尻驛に着いた、此處は庵原郡に屬し、人口



(尾張) 名古屋城(背面)



川龍天(江遠)



(江遠)

三方ヶ原の古戰場



寺華龍(河駿)

四、名古屋城

伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ尾張名古屋は城でもつ

(俗 語)

三、三方ヶ原の古戦場 元龜三年十二月武田信玄と徳川家康との戦ひたる處にして今の濱名郡三方原村なり。

天邊萬俣似箕形 高叫奇々卸笠行 猶秘士峰眞面目

(漆桶萬里)

四、天龍川 はや横雲の引間より天龍川も見えたり、裏へはつる  
姿の池田の宿、鷺坂、旅寢にだもなれぬれば、夢も見附の國府と

(謡曲東國下)

四、龍華寺 元和年中、甲州大野山木遠寺の日近上人開基、國主頼將公の母養珠院殿の建立、東海無双の眺望なり。

約四千二百、前面に三穗ヶ崎斗出して一小灣をなし、其の西岸に清水港がある、停車場よりは僅か十町餘であるが、此處は安倍郡の管内である、人口六千餘を有し慶長以來、良港の稱がある、今は特別輸出港として指定せられ、船舶常に輻輳し、甲斐地方山間の物産は一に此の地より輸出せられる、町には徳川氏の御殿址、海濱には海水浴場の設備がある。

清水港の南十餘町、不二見村大字村松には龍華寺がある、境内は富岳を望むに絶好の場所たるのみならず、脚下は茫漭たる駿河灣を一眸の下に集め、風光壯美、備前の櫓、服部洪齋が之を以て天下第一の美觀と賞揚せしこと敢て過言ではない、されば寺は觀富山と稱し法華宗に屬し、日近上人を以て開山としてある、大蘇鐵、鶴松、霸王樹等の名木は廣き境内を奥床しく飾り、明治の思想家、評論家、詩人として人も知る高山樗牛は、此の寺の眺めよき奥津城を最後の休息所とし、其の弟齋藤野の人も亦家兄の側に眠つ

て居る、神秀壯美、東海萬古の勝區たる清見潟、柔かなる南風は長へに蘇鐵の葉を吹いて、人をして文人兄弟を偲ばしめる。

『天地萬有に服従して少しの線言も言はず、此の現象の世界を辭してプラトーンの門に入つて逝きました、彼れの心には喜びの安心を抱いて、此の世よりも一層善良な未來世のあることを信じて、その肉体の一生を終りました』(ケーベル)

之より迂曲して更らに東北に進めば、即ち東海の絶勝三保の松原である、一條の青松美人の黛の如く長さ一町餘、沖より來る潮風は松の梢に觸れて不斷の清音を奏で、白沙一路、露の降ること繁く、對岸は清見潟の穩波を隔て、清見寺一帶の山巒逶迤たるを望み、更らに仰げば芙蓉峰千古の雪を戴いて屹然として天をり立つ有様、既に塵界の景ではない、海岸を距る五町餘の松原には三種神社あり、遠く景行天皇以前の創立にかゝり大道貴

命、三種津姫命を合祀してある、歴朝の天皇世々の崇敬深く、足利氏、徳

川氏等も亦尊崇淺からず、社領の寄附、社殿の修築等に力を致した。

松原によれる海濱には彼の天女、霓裳羽衣の舞樂を以て名高い羽衣の松がある。

『おもしろや、あめならで、爰も妙なり天津風、雲の通ひ路吹とちよ、乙女の姿しばしとまりて、此の松原の春の色を三種が崎、月清見潟富士の雪、いつれや春の明ぼの、たぐひ浪も松風も長閑なる浦の有様(謠曲

羽衣)

これより汽車は東海の絶勝地帯を走る、興津驛は人口凡八千餘、庵原郡役所、警察署、農商務省園藝試験場等あり、商業盛にして興津鯛、魚煎餅、羽衣館等の名物もある、而かも風光絶佳なる上に冬は暖く、夏は海水浴場の設備もあり、名士の別荘所々に散在し、遊覽者の出入頗る頻繁である、

清見寺は町の北高く青山に倚り、鐵道は此の下を通過して居る、寺門は昔の所謂、清見ヶ關の址にして、今猶突棒、差股、銀等を藏し、其の庭は遠く雲烟の間に伊豆の峰巒を望み、近くは老枝蒼翠たる三保の松原を見下し松聲瀾語、實に人をして恍惚たらしめる。

亭子 藤蘿外

潮光 戸牖間

魚龍 吹浪出

舟楫 傍欄還

堂前、梅あり、櫻あり、清見瀉霞暖かなるの交に至れば、薰香馥郁として南暝より來り、珠簾音なくして半天より垂れ、天女も降りて舞樂を爲さん風情がある、寺は天武帝の白鳳二年の草創にして、淨見長者の開基、僧明元の中興開山である、本尊は觀世音、客殿に足利尊氏の像がある、嘗つて、

英照皇太后陛下、東宮殿下、其外各女王殿下御滯留あらせられ松の御手植等を遊ばしたことがある。

清見瀉は勿論庵崎、許奴美等皆興津の海岸にある勝地にして、之れより蒲原驛に至る間には北に薩陀山あり、山勢海岸に延びて忽ち斗絶し、激浪其の東南の斷崖を洗ふ、山の一端を山の神と言ひ、此處に望嶽亭がある、蜀山人歌つて曰はく

山の神 薩陀峙の風景は

三下り半に 書きもつきせし

と、又益人の歌に

庵原の清見の崎の 三穂の浦の

ゆたけき見つゝ物思ひもなし

と、寔に閑を得て、此の地に逍遙したならば何の物思ひもなく、悠々自適

することが出来るであらう、一番阪、二番阪、蜂ヶ澤、山の神、平の頂に至るは其の東面にして、午茅阪、葛籠阪、女夫阪を降つて興津河畔に至るものは其の西面である、觀應二年足利氏兄弟此處に戦ひ、又永祿の頃、武田、今川二氏、同十三年武田、北條二氏の戦つた古戰場である、之れより由比の町を北に眺めて蒲原驛に着けば、宿の南に矢矧の長者が娘、淨瑠璃姫の墓がある、有るか無きかに荒れ果てたる古墳は、老松之れを繞りて嵐淋しくおとづれて居る、昔、此の姫牛若丸の後を慕つて、奥州へ下らんと三河の國より兎にも角にも此處までは、辿り着いたが、かよわき女の足、疲れに疲れて、遂に此の里に焦れ死んだ、里人之れを憐んで、此の塚を建てたと名所圖會に書いてある。

蒲原は菴原郡の南端に當り、由比町を併せて人口凡八千、可なり繁華な町にして城山と稱する古城址よりは、鮑、帆立貝等の化石が出る、富士は至

る所の背景となつて趣を添え、三保の松原は見る處の異なるに随つて其の景趣を換えて居る、蒲原の東南富士川の吐口、渺茫たる駿河灣に向ふ所を吹上嶺といふ、富士は益々近く、三保の松原は漸く遠ざかり、遙かの沖は浩蕩模糊として南限に連つて居る、蒲原より鐵道は急曲して北に向ひ、岩淵驛に着く、此處は甲州街道の衝にして、此の街道は即ち日蓮宗の總本山たる身延山久遠寺の賽路である。

汽車はやがて岩淵を發し、富士川の鐵橋を渡つて鈴川驛に着く、富士川は大井川に劣らぬ急流にして、源を甲斐國に發し笛吹川、釜無川、蘆川の三川を合はせて駿河國に奔下す、甲斐の大門口以下十八里、昔角倉了以、徳川幕府の命を承けて此川をさらひ、猷澤より岩淵に至る舟楫の便を開いた。鈴川驛は富士郡に屬し、富士の南麓に於ける要驛にして、昔は吉原町の續きであつたか、寛永十六年、水害を避けて今の處に移つたのである、吉原

は當驛の北三十町餘の處にあり、人口凡四千五百、郡役所、區裁判所、警察署等の外、妓樓軒を列ねて弦歌の音盛んである、富士は正面に屹立し、花の顔、サツと紅粉を施し「腰より下は愛鷹や、裾はぼかしの浪模様」といつたやうな風情である、又鈴川停車場の南に當つて一丘がある、天の香久山又は沙山と言ひ、眺望頗る佳である、此處より數町にして海岸に至れば昔山邊の赤人が、「田子の浦にうち出て、見れば」と詠んだ所謂田子の浦にして浦の坂路を田子の呼坂といふ、長汀十里、うちよする大浪小浪、眺めもあかぬ富士の高根、三保の松原、伊豆の山々

げさちりし甲斐の落葉や田子の浦

(芭蕉)

安豆麻路の手兒の呼坂こえていなば

吾は戀ひなんのちはあひぬとも

(萬葉集)



(駿河) 田子の浦



(相模) 箱根の關址



(相模) 箱根離宮



(駿河) 東海道吉原の富士

望、吉原の富士 富士山

柴野栗山

誰將東海永 濕出玉芙蓉 蟠地三州盡

挾天八葉重

雲霞蒸大籠 日月避中峰 獨立原無競

白爲衆嶽宗

哭、田子の浦の富士

田子の浦にうち出て、見れば眞白にぞ

(山邊の赤人)

富士の高根にゆきはふりける

心あてに見し自雲はふもとにて

(村田春海)

思はぬ空に晴る、富士の嶺

望、箱根關所址

萬馬嘶天際 叩關人作群 密林含細雨 怪石抉層雲

鎖鑰嚴賊守 魏猶血戰勳 英雄窺竊據 駕馭寄英君

哭、箱根離宮

玉くしげ箱根の山のみれふかく

(双石)

亦海見えてすめる月ッげ

(夫木和歌集)

鈴川より駿東郡なる原驛に至る間に浮島ヶ原がある、此處は彼の平維盛が大軍を率いて頼朝討伐に向つた時、水禽の飛翔に驚き一戦にも及ばずして潰走した處である、此の地昔は海上に浮んで、恰も蓬萊の三島の如くであつた爲め此の名ある由、源平盛衰記には

『浮島が原に着きぬ、北は富士の高根なり、東西に長沼あり、山緑陰を浸して雲水も一つなり、葦分小舟竿掉て水鳥心を迷はせり、南は海上漫々として蒼波渺々たり』と書かれ太平記には

『明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、鹽干やあさき船浮きて、おり立つ田子のみつからも、浮世をめぐる車返し』とある

其の浮島の沼は富士沼とも稱し、古人は之れを須戸の湖と言つた、東西三十六町、南北二十四町、沼の水は潤川となつて海に注いで居る。

千株松下双峰寺

一葉舟中萬里身

白樂天

あしからの關路越えゆく東雲に 一むら霞む浮島が原 後京極  
 原町は舊く原宿と稱し人口凡六千、昔は五十三次の第十三宿であつた、此處に松蔭寺がある、弘安年間天祥西堂の開基にして彼の有名なる白隱禪師は寶曆年間、此處に住し、明和五年此の寺に入寂した、寺域の東隅、松嵐妙なる處に建てる荆叢塔は即ち禪師を葬れる處にして、神機獨妙禪師とは其の諡、明治十七年五月畏くも勅諭を賜ふた、言はく、正宗國師、國師諱は慧鶴、鶴林と號し又別に關提翁とも稱した、駿河國駿東郡原驛の人、俗姓は杉山氏、幼名を岩次郎と言ひ、父は宗彝と言つた、其の先は九郎義經の臣鈴木三郎重家にして鎌倉の時、義經の奥州に通るゝや、重家これに後れ、其の到底趁及すべからざるを知つて、一族七騎と共に伊豆の江梨邑に隠れた、杉山氏は即ち其の末裔である、母は長澤氏人と爲り醇良にして常

に慈善の行を好んだ、長澤氏三男二女を生み、國師は其の第三男である、貞享二乙丑年十二月廿五日に生れ、明和五戌子年十二月十一日に遷化した、國師の書き遺したもので遠羅天笠、假名法語、さし藻草、邊鄙以知吾、夜船閑話、寶鏡窟記、辻談議、主心お婆々粉引歌、施行歌、安心ほこりたゝ記、大道ちよぼくれ、おたふく女郎粉引歌等がある、悟道明達實に近世の高僧碩徳であつた。

其の施行歌の一節に曰はく

子を慈しむ親こゝろ  
 荒い風をも厭ひしぞ  
 それほど親に思はれて  
 親をおもはぬおろかさよ  
 親に不孝な人々は



鶯や鳥に劣りたり  
 娘むす子をしつけるに  
 惜しむ寶はなきものぞ  
 親の後生の爲めならば  
 その金出して施行せよ  
 飢死ぬ人を助けなば  
 それに勝れる善事なし  
 たどひ萬貫長者でも  
 死んで身につく物はなし  
 妻も子供もせに金も  
 捨て冥途の旅立ちぞ  
 冥途の旅立ちする時は

耳も聞えず目も見えず  
 ゆくる知らずに門を出で  
 闇をやみちに入ることぞ  
 其の時後悔かぎりなし  
 兎角命のあるかぎり  
 菩提の種を植ゑたまへ  
 命は脆きものなれば  
 露の命と名づけたり  
 今宵頭痛が仕初めて  
 九死一生なるもあり  
 強い自慢をする人も

暮に頓死をするもあり

けふは他人を葬禮し

明日は我身の葬禮ぞ

然らば頼みなき娑婆に

金銀蓄へ何にする

富貴幸ひある人は

貧者に施しせらるべし

貧者に施しせぬ人は

富貴で暮すかひもなし』

斯の如く最も通俗的に佛の道を説き、嘉言善行を勸めたる所實に圓滑

ある、此の高僧を生み、此の高僧の墳墓をといめたる原驛も、亦以  
誇るに足るであらう。

原驛の風光たるや、愛鷹山、半次郎山、鷺巣山は軒端に近く峙ち、崇高な

芙蓉峰は、更らに其の上に屹立し、颯と夕陽を受けて乾坤を區劃した

る眺めは、恰も太古より鬱積せる神州天地正大の氣を吐くが如くである、

紅葩は、此の壯絶なる精氣にうたれつゝ沼津驛に着いた。

沼津町は駿東郡の南端に位し、西北には愛鷹山を負ひ、南は駿河灣に臨み、

人口凡一萬四千を有する東駿の一名邑にして、函嶺に源を發する狩野川は

町の東南を流れて海に注ぎ、其の吐口は即ち沼津港にして船舶常に輻輳し

伊豆の下田、松浦、戸田等に通ふ汽船の發着頻繁である、此の地維新前は

水野氏五萬石の舊城地にして、其の沼津城又の名三枚橋城は今の停車場附

近にあつたが、悉く拓かれて更らに舊觀の俾ふべきものかない、海岸に至

れば即ち千本の松原にして、一帯の白沙、翠松相連り、田子の浦、三保

の松原、遠くは久能山と駿河灣一帯の風光を一眸に集め、南は伊豆の大瀬

崎呼べば將に應へむとし、眼を上げれば富岳、函嶺、勇姿颯爽!! 神は何故に斯く我が國を羨はしく造り給ふたかと怪しまるゝ程である。

町の附近海岸に近く、浮世をめぐる車返しの坂、或は右大將源頼朝牧狩旅館の跡等あり、又三位中將維盛の愛子六代君の斬られたる處なりといふ六代松は字東門間の千本濱に、牛臥海水浴場は狩野川に架せる湊橋を渡つて十餘町牛臥山の南麓にある、又其北麓には我入道海水浴場、字桃郷には東宮御用邸がある、紅葩は東海の濱、何ぞそれ愛すべきの風光に富めるや、あゝ富士の高根!! 清見瀉!! 富士の高根!! 清見瀉!! と心に繰り返へし、繰り返へして三島驛に着いた、此處は即ち伊豆の三島である。

町は東海道線の三島驛よりは南十五町に當り、伊豆國田方郡に屬し、東海道線の三島驛は駿河國駿東郡である、東北には箱根の山々を負ひ、西は黄瀬川を隔て、沼津に相望し、南は伊豆街道である、昔は國府の所在地且つは箱根

西麓の休息地として往々歸へさの人馬絡繹たる有様であつたが、今は鐵道開通して少しく寂寞の姿である、併し猶人口一萬餘を有し、郡衙、警察署等の官衙もあり、又妓樓市中に散在して稍風俗をやぶるの憾があるが、併し、老いたりと雖、伊豆の三島たるの價値はある、町の西北數町、小濱といふ處には小松宮家の御別邸あり、其の庭前なる大池は即ち「富士の白雪旭で溶ける、とけて流れて三島へ落つる」と小唄にある、所謂富士の溶雪水と稱するものにして、極めて寒冷、駿豆數個村の用水に使用して居る、又東海道中熱田神宮に次で名高き三島神社は町の中央にあり、大山祇命を祀り官幣大社に列せられ、社は遠く天平年間、同國賀茂郡三島より勸請したるものと傳へられ、朝廷の尊崇は勿論、頼朝、家康等武將の大いに信仰した所である。

舊箱根街道は三島より鐵道と分れて、東直ちに箱根山にかゝつて居る、箱

根の群山は地理學上富士帯火山脈に屬し、往古は灰を降らし、熔岩を流したる焦熱地獄の地にして、殊に其の成立は二重式である、即ち最初噴火したる時其の火口の周邊に數個の山を作り、後又噴火するに及んで舊火口の内部に更らに中央火口丘を現出したのである、之れより、峻山高峰、四方に蟠延し、西北に延びたるものは富士となり、南に延びたるものは伊豆の諸山となり、かくて其の脈は東西の分水嶺をなし、之より落ちて流る、水は、東は相模灘に、西は駿河灣に注いで居る、昔西國より來つて東國に入らんとする者は、先づ概ね此處を通らなければならなかつた、然るに峰高くして道細く、山嶮はしくして苦滑か、支那の函谷關と比し敢て劣らざる天嶮と稱せられ、昔は此處に關所を置き、平時は以て行人を警しめ、有事は以て緩急に備へたのである。

箱根の山は天下の嶮

函谷關も物ならず

萬丈の山千仞の谷

雲は山をめぐり

晝猶暗き杉の並木

一夫關に當るや

天下に旅する豪氣の武士

八里の巖根ふみならし

鎌倉の右大臣、箱根山を過ぎ伊豆の海を眺めて

はこね路を わが越えくれば 伊豆の海や

沖の小島に波のよる見ゆ

と詠んだ、此の歌は和歌の中でも名高いものになつて居る、頂上に湖あり蘆の湖といふ、湖面延長約二里、四面峰嶽の山に圍まれ、西北には八面玲瓏の富士の山、群山を抽いて高く聳え、其の影を倒まに湖心に浸して居

前に聳え後へにささぶ

霧は谷を閉ざす

羊腸の小徑は苦滑か

萬夫も開くなし

大刀腰に足駄かけ

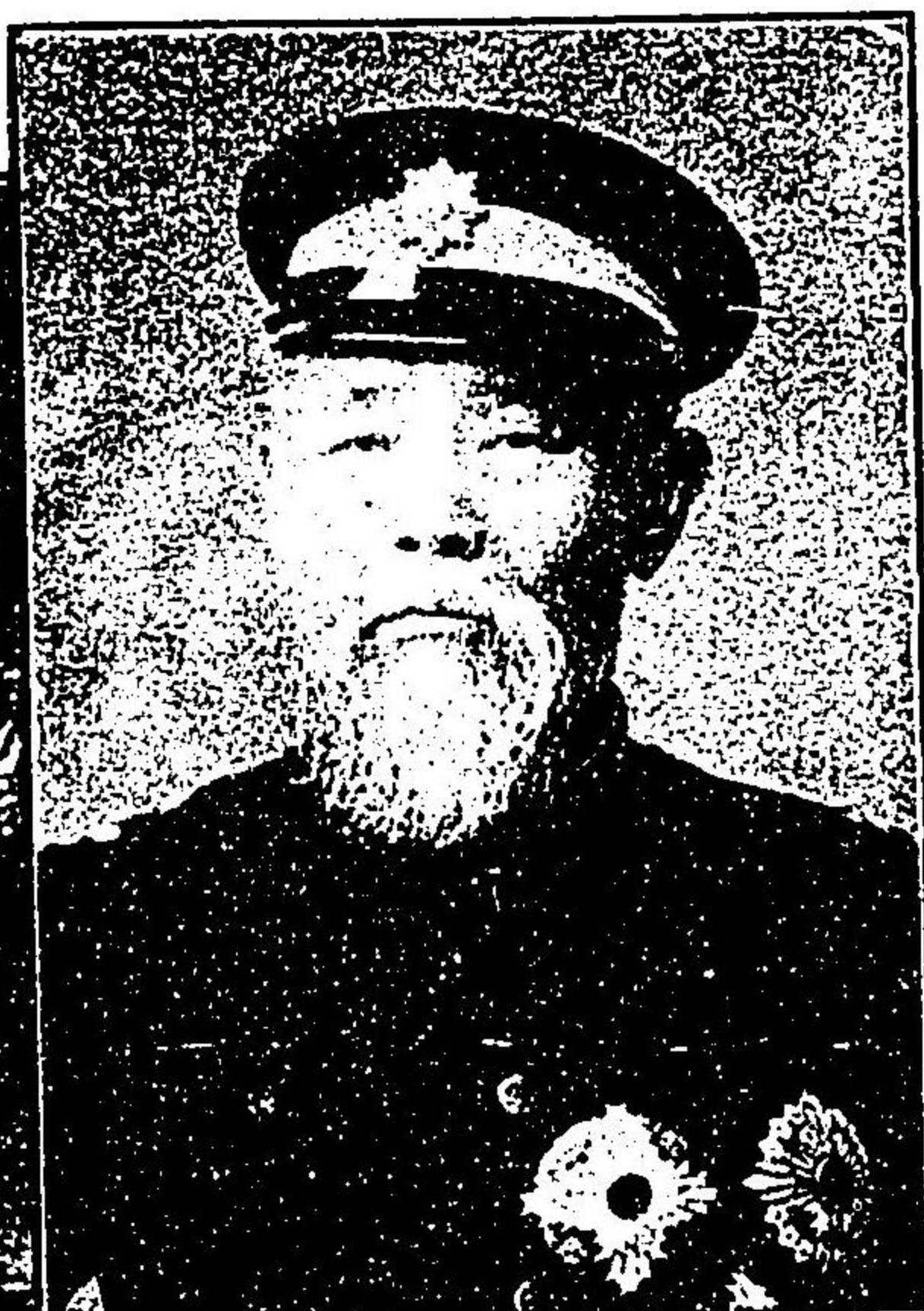
斯くこそありしか往時の武士

る、湖上に突き出でたる塔ヶ島の上には、箱根離宮恰も繪ける屋氣樓の如くに立ち、湖畔東より西へ人家蕭疎として連り美觀極まりなし、古の關址は離宮の前を過ぎて數町の西にあり、又湖の東岸、駒ヶ嶽の南麓には箱根神社がある、孝謙天皇の天平寶字丁酉元年、勅願を以て勸請する所箱根山縁起に

高野天皇の天平寶字丁酉、彼の靈瑞遠く天聰に達し、即ち勅願として梵宮を造り、靈廟を飾るに金玉を以てす、而して三容を一社に崇め奉る靈廟は各箱根三所權現と號す

とある、代々朝廷の崇信篤く、又坂上田村麿、源賴義、源賴朝、北條時政など英傑の士多く此處を信仰した、されば昔は朱樓紫殿の雲に重れる粧、岩室石龜の浪に臨める影と言はるゝ程の壯麗であつたが、今は往時の觀なく唯古木寒巖、神寂びたる趣は遠く塵界を離れて、正に之れ幽遠の境である。

故 伊 藤 公



(模相) 瀧の垂玉



(模相) 箱根山杉並木



(模相) 箱根蘆の湖



巽、蘆の湖

二所へ参りし時、菅根のみづ海を見て

源 實朝

たま櫛笥はこれの海はけけれあれや

ふた山かけて何かたゆたふ

(金楓集)

吾、箱根玉垂の瀧

川となる末まで清し岩間より

落ちて流るゝ玉垂れの瀧

吾、箱根杉並木 峯高くして道細く、山峻しうして、苔滑かに、老杉

天を摩して晝猶暗し。

吾、故伊藤公 天地遂に終始なく、人生必らず生死あり、公はよく

一身を君國に捧げて偉名を千載青史にとりめたり。

箱根はこれのみで最早つきたるには非らず、少くも箱根は日光と並び稱せ  
ちるゝの勝地である、これのみにては到底日光と比すべくもない、然るに  
日光に求むべからずして箱根唯り之れを有するものがある、即ち温泉であ  
る、而かも風光明媚にして設備完全なるものである、湯本、塔ノ澤、宮ノ  
下、堂ヶ島、木賀、底倉、蘆ノ湯、を始めとして近年開設せる仙石原、強  
羅、大湧谷、姥子等がある、塔ノ澤より約十町餘塔ノ峰の半腹に阿彌陀寺  
がある、淨土宗にして慶長年間小田原の城主大久保忠隣の創建にかゝり淨  
瑠璃、いざりの仇討で名を知られて居る、此處を下りて湯本より國府津方  
面へは電車の便がある。

紅葩の乗つた汽車は昔、金太郎が熊を集めて角力の稽古をしたといふ金時  
山や、明星ヶ嶽、又は足柄舊道の山を右手に眺めて御殿場驛に着いた、驛  
は駿東郡の東北隅に位し御厨町の一部である、海拔二千尺餘なる裾野の原

遠く裾を引いて下の宮淺間神社の森は鬱蒼と繁り、まだ夏ながら草々の花は秋のけはひを見せ、丈け延びたる女郎花、矮き罌粟などははれに旅人の心を牽く、昔徳川家康の遺骸を久能山より日光に移す時、此處に假殿を造りたるより御殿場の名ありとか、若しそれ此處に下車して須走に出で籠坂峠を爪先上りに越えて甲斐に入り山中、河口、精進等所謂五湖の景を尋ね、青木ヶ原の樹海の風色を賞し割石峠を越えて駿河に入り、上井出村附近にて源右府が富士の牧狩の跡を尋ね、鷹岡村に曾我兄弟の墓を弔らひ、吉原より鈴川方面に出でたならば金風空を吹いて、昨日の富士は今日の富士にあらず、裾野の野趣は如何に大いなる自然美に富むかを知るであらう。

秋の雲 富士を色々に翺りけり

(名を逸す)

紅葩は嘗つて此處より富士を翺る雲を分けたことがある、太郎坊で編笠と金剛杖とを買ひ、八合目で肌を刺すが如き夜氣と山風とを習し、磊々たる山

骨更らに尺木寸草だも生せざるを見て自然の偉大なる魔力を感じた、今も其の時に摘んだ裾野の野薔薇の花、玉簪花の花は昔のまゝに咲き亂れて、人待ち顔をして居るであらうか、あゝなつかしき裾野の花よ………憧憬懐舊の思を乗せて汽車は小山驛を過ぎた、此處は駿河國の北隅にして之よりまさに相模國に入らんとする所である、此の南、數町の舊道は所謂足柄山竹之下の道で、昔、新羅三郎義光、奥州下向の折、月夜此の山中にて豊原秋元より笙の秘曲を傳授せられた事は著名な話である、又「足柄山の嶺より大磯、小磯見下して袖にも波は小ゆるぎの」と太平記に書かれたる其の展望の地は此の邊であらう、これより線路は次第に下りとなつて、汽車は相模國足柄上郡山北驛に着いた。

### 15、相模國

酒匂川……山北の鮎館……松田驛……道了權現……道了の傳説……國府津驛……

密柑の山…曾我兄弟の遺跡…二宮尊徳…偉人は不滅なり…二の宮驛  
 …大磯驛…歌妓脂粉の地…蒼浪閣…鳴立庵…西行堂…曾我祐成と虎  
 御前…高麗神社…伊藤公…伊藤公の概歴…伊藤公は幸運兒なり…平  
 塚驛…大山…雨降神社…岡崎城址…高見ヶ原の古戦城…太田道鑑…  
 秦野煙草…茅ヶ崎驛…馬入川…茅ヶ崎の風光…寒川神社…藤澤驛…  
 遊行寺…長照院…片瀬の海岸…天然美と人工美…大松驛…常樂寺…  
 北條泰時の墓…泰時の人物…泰時の政治…戸塚驛  
 酒匂川漸やく溪流の趣を呈し、水清くして巖滑か、川に鮎を産する、東海  
 道を過ぐる旅人の最も珍重する山北の鮎鮎は即ち此處の名物である、山北  
 より線路は益々下つて松田驛に着く、此處は當郡の中心として、郡役所、  
 警察署等がある。  
 道了權現は西南約一里半、南足柄村字關本の最乗寺にある、寺は曹洞宗に

して應永元年の草創にかゝり、結構頗る壯麗である、道了薩陀殿、大天狗  
 小天狗等を祀れる處は、觀音堂の結果門より石階を登つて其の上にある、  
 傳説あり

昔、當山の開祖了庵禪師の弟子に、道了といふ者があつた、大力無双の  
 上に神通力あり、當寺草創の際には自ら大木大石を運んで、其の工事を  
 助けた、然るに應永十八年三月、病んで將に入寂せんとする時、忽ち  
 身を天狗と變じ、永く山門を鎮護せんと言つて雲中に飛び去つた。  
 と言ひ傳へられてある、境内、老杉亭々として冷風、肌を粟を生せしめる。  
 松田より六哩三、十三分にして足柄下郡なる國府津驛に着いた、萬松一路、  
 長く海岸に連りて相模灘の碧波と相映じ風光佳絶、海水浴場の設備もある、  
 小田原、熱海、箱根地方に至るには電車の便がある、北に起伏する丘陵に  
 は、多く密柑を植るたれば、初冬霜白き頃、金丸山に満ちて其の眺め亦一



段である、此處より北約一里、會我中村は會我兄弟の出生地として其の古跡多く、西北柏山村は二宮尊徳翁の生地として知られて居る、二宮翁に就いては、近年あらゆる方面より研究し盡されたれば此處には書かないが、唯紅葩は偉人の不滅なることを思ふた、唯り二宮翁に限らず之を大にしては釋迦然り、孔子然り、基督亦然り、之を小にしては苟も一村一國の爲めに力を竭し、父母兄弟に孝悌を致した古來無名の偉人は、其身死すとも其の感化は永く後世を導きて、現に碌々として徒に生きて居る我等に優ること萬々である、二宮翁の報徳の教たるや實に其厚世の化大なるものである。

勤儉力行農理を悟り

世に報徳の教をのこし

荒地拓きて民を救ひし

勤のあとか、二宮神社

國府津より二哩九にして二ノ宮驛、を過ぐれば中郡大磯驛である。

此處は昔、陶綾の磯或は小餘の浦と稱したる海岸にして、建仁元年右大將頼朝、此の地に宿り、歌舞の會を催してより、星月夜鎌倉山の盛時、武人行樂の地である、七百年の昔、白馬銀鞍の若侍達が、歡樂の腕にすからんとして化粧坂の邊、花水橋の畔に逍遙せし夢は空しく消えて、爾來幾春秋、唯、磯うつ波の音のみ淋しき一寒村であつたが、今は故從一位大勳位公喬伊藤公の主なき蒼浪閣を始めとして貴紳の別荘多く建てられてある。西行法師が『鴨立澤の秋の夕ぐれ』と詠んだ鴨立澤は、町の西端四町餘の處にあり、細流海に注ぐ丘上に西行堂、鴨立庵あり、庵は寛文年間、小田原の俳人崇雲の建つる所、鴨立の碑は伊勢の人、三千風此處に閑居して建つる所である。

鴨立ちて なきものをなに 呼子鳥

三千風

延壽寺の境内なる虎子石は、曾我祐成と虎御前との昔を偲ばしめ、町の後なる高麗寺山には高麗神社ありて、頂上の眺めは、浩蕩萬里に渉るの觀がある。

虎娘元是倡家人 同契貧郎捨此身

今日堪憐遊宴地

唯題片石問遺塵

林 春齋

さて大磯に來つて故伊藤公の別墅、蒼浪閣の門前を過ぎた人は定めし感慨に堪えざるものがあるであらう「棺を蓋うて人定まる」伊藤公も生前は兎角の批難を免れなかつたが、飽くまで好運なる公は遂に燦爛として人目を眩するばかりの壯烈なる最後を遂げ、以て偉名を千載青史にとゞめた。

藤公元と微賤より身を起して王政維新の大業に力を致し、後兵庫縣知事より參議、工部卿等に累進し、明治十五年には歐羅巴各國の制度取調の爲め

渡歐し、十七年歸朝して制度取調局長官に任せられ、又其年朝鮮事變に關して清國と紛議を生ずるや命を奉じて清國天津に趣き、彼の使臣李鴻章と會して所謂天津條約を締結し、十八年には第一次の内閣總理大臣となつて内閣を組織し、廿一年には樞密院議長に轉じ此の間萬世不磨の憲法案を起草し、廿三年帝國議會の召集せらるゝや貴族院議長に任せられ、二十五年以後内閣を組織したること三回、就中明治二十七八年の日清戦役に處しては大命を啣み、清國の構和大使李鴻章と下ノ關に相會して、所謂馬關(下ノ關)條約を締結し、三十三年には政友會總裁となり、後再び樞府に入つて其の議長となつたが三十八年日露戦争に依つて、韓國の我が保護の下に屬するや統監となつて老軀尙倦ます屈せず力を國家に竭した、然るに明治四十二年十月廿六日、露國藏州とハルビンに於て會見せんとするに當り、韓人の狙撃に逢つて遂に斃れた、之れ實に藤公が懾々たる生涯の終りであつ

た、藤公は實に得難き好死所を天より與へられたと言はねばならぬ、再び繰り返へさむ、藤公は實に好運なるかな!!

大磯を發して二哩四、七分餘にして平塚驛である、此處は中郡の南端に位置し、東海道中の要衝である、人口約五千、松影を穿つて海岸に至れば海水浴場がある、風光明媚海濱には病院杏雲堂がある、花水川は町の西方を流れ、相模第一の高山大山は町の遙か北方に登えて居る、此の山は一名雨降山とも稱し、頂上に有名なる雨降神社がある、富士、足柄方面より蜿蜒せる山脈は足柄、津久井、中、愛甲等の郡界に來つて高峻となり、大山は實に海拔六千二百尺に達し、山容恰も巨椀を倒まにしたるが如く、山北は愛甲郡に裾を引き、東南は中、高座の平地に臨んで居る、所謂大山石尊、或は大山雨降神社は此處に祀られてある、祭神は大山祇命にして神体は一箇の巖石であると言はれる、維新前は佛に歸し眞言宗に屬して、坊舎十八

院を有する巨刹であつたが、明治に至り神佛を區別するに及んで神道に歸し、今は縣社に列せられてある、祭日は春、夏の貳回にして、春は四月一日より廿一日まで二十日間、夏は七月廿六日より八月十五日まで廿一日間就中七八月の祭禮には、登山參賽する白衣の行者を始めとして老若引きも切らず、一山爲めに大いに賑ふ、男坂、女坂を登つて山頂に達すれば天空開瀾、關八州の渺茫たる平野を瞰下して眺望雄偉である、又山中二重瀧、大瀧等の瀑布諸所に懸りて景趣掬するに足る、山の南麓には大山町があつて商家、旅舎、神官の家等約四百戸、名物の挽物細工を營ぐ家が多い。

平塚より大山に到る途上、岡崎村には永正九年、北條早雲が三浦義同と戦ひたる岡崎城址、高屋部村には文明十八年、上杉定正が山内顯定と戦ひし高見ヶ原の古戦場、又其の北なる上粕屋村の洞昌院内には太田道灌の墓がある、之れ即ち道灌が山内顯定の計にかつて、粕屋の第に死せし遺骨を

埋むる所と傳へられる、老松武株、其の間に四尺ばかりの五輪塔を建て、ある「孤鞍衝雨叩茅茨」の詩は、道灌が鷹狩に出で、雨に逢ひたる時の事を詠じたるものにして彼は國風に長じ、兵法に達し、風彩魁偉、穎悟にして大膽なる名士であつた、道灌は其號にして名は持資、通稱は源六郎、上杉定正の臣である、康正二年江戸城を築き、長祿二年に成つた、河越、岩槻と共に鼎立して上杉家の重鎮であつた、月の入るべき山の端もなく、草より出で、草に入る武藏野が、今日人口貳百萬を有する世界の大都會となつたのも其の開拓の恩人は實に此の人である。

糟屋より西二里餘にして秦野村地方に至れば名高き秦野煙草の耕圃遠く連つて其の栽培頗る盛である。

平塚より行くこと少許、馬入川の鐵橋を渡れば高座郡なる茅ヶ崎驛である最早此の邊は東京、横濱の匂ひがして居る

馬入川、本名は相模川と言ひ、馬入は傳説による俗稱である、此の川の上流は即ち桂川にして今、東京電燈株式會社の發電所のある處は即ちそれである、源を甲斐國都留郡の山間に發し津久井、愛甲、高座の三郡を貫流し途中に於て、中津、小鮎の兩川を容れ、茅ヶ崎の西南柳島に至つて海に注いで居る、流長約三十里、舟楫を通ずる所は其の半である、春夏の候は多く鮎を産する。

茅ヶ崎は其の風光優美、空氣清透、別莊多く建てられ、海水浴場の設備もあり、特に病者の靜養地としては最も適當、南湖院と稱する肺病患者を保養せしむる病院もある、海岸より十六町餘の海中には烏帽子岩と稱する頗る大なる巖があり、又驛の北約一里十町、寒川村字鶴峰には國幣中社寒川神社がある、祭神は應神天皇にして今より一千百年前の勸請と傳へられる、昔は相模の一の宮と稱し賴朝以下北條氏、徳川氏等の崇信が篤かつた

毎年九月十九日に執行せらるゝ神事流鏑馬は稀なる盛典である、野廣く、海近く、風清く、天然の美を有する茅ヶ崎は實に絶好の静養地である。

汽車は茅ヶ崎より十二分にして藤澤驛に着いた、町は鎌倉、高座の二郡に跨り、鎌倉郡に属するを藤澤大宮町と言ひ、高座郡に属するを藤澤大宮町と言ふ、境川其の間を貫流して町を二分して居る、人口八千を有し、古來東海道の名邑である、大宮町の北端には名高き遊行寺がある、時宗の總本山にして藤澤山清淨光寺と稱し、建長、圓覺、光明の三寺と共に鎌倉四大寺と稱せられる、正中二年、俣野五郎景平の建立する所にして住職多くは宗祖、遊行上人の遺志を継ぎ、全國を歴遊して弘法布教につとむるを以て、世人之を遊行寺と稱するに至つたのである、寺の後山に富士見亭あり眺望絶佳である。

又寺中長照院には小栗判官の像を安置し、判官及照手姫に關する遺物、

遺跡等あれども歴史上の眞偽は容易に決することは出来ぬ。

藤澤より電車に乗つて、南片瀬の海岸に出で、之れより七里ヶ濱の白沙を踏んで江の島、鎌倉より三浦半島の名所古跡を尋ねたならば自然美と人工美との相抱合したるものを、更らに飾るに奥床かしき歴史的遺蹟を以てする湘南の天地は何人をも恍惚たらしめずんば休まないであらう。

五十三亭控海東一 故關右折路岐通

湖南草樹春雲碧 畿内峰巒夕日紅

流峙依然此形勝 興亡已閱幾英雄

分明攻守千年勢 著論誰追賈誼風

(頼山陽)

由來我國は天年の風光に富める上に、人工美を加へたる無數の名勝舊蹟に豊かである、従つて我等は花の朝、霞の夕、此の二大美に接し、否此の大美中に生長して片時も山水の美といふ觀念を離れた事がない、されば古

來我が國に美術の發達したるも實に故ある事である、湘南の地に遊ぶ人は………東海の濱に逍遙する人は………此の天空開潤にして秀麗優雅なる大美を能く觀照樂受して俗塵を洗ふ事も亦人格修養の一端であらう。藤澤より幾何もなくして大船驛、此處は鐵道横須賀線の分岐する所にして驛より約十五町の處に常樂寺と稱する寺院がある、瑩域中北條泰時及び木曾義仲の嫡子、清水冠者義高の墓がある、泰時の墓標の前に立たば誰か彼れを慕て悵思低徊しない者があらう、彼は日本一の奸雄と稱せらるゝ義時の子である、しかも義時の如く奸ならず黯ならず、溫厚にして而して沈毅なる名將であつた、彼が民を本とするの政治は、武人專權時代に於て最も善政なりと賞揚せらるゝ處である、承久の役に當り彼は父義時の命に依り京師に入つて官軍を厭伏し、三上皇を流し首謀者を捕えて之を斬つた、けれども是は義時及び大江廣元等の謀議處斷したる處にして當時何の權も

無き泰時の責任ではない、泰時の眞の面目は彼が父祖の後を承て自ら政治を總攬した時にある、彼の政治たるや、質素簡易民に近づき、王朝時代の浮華空文を棄て、直裁明快を尊び、位は從四位下を以て無上の榮進となし、以て實權を收むることに力め、廉潔直言の意氣あるを愛して收斂奸邪を黜け、輿論と道理とを基礎として以て民の幸福を計つた、歲凶にしては窮民に金を貸し、米を頒ち、租税を免じ、困苦歛乏の極其の借りたるものを返す能はざる者には、券狀を焼き捨て、以て心を安せしめた、是に於てか天下翕然として北條氏に悅服し、泰時の爲めには死も惜しからずと言ふに至つた。評定衆といふ合議機關に依つて政令の原案を議せしめたのも、此の時より始まつた、税法を五公五民にしたのも此の時である、正邪曲直を明かにして生命財産の安全を保証せられたのも此の時である、是を以て後世史

家は泰時一人の功勞、能く父祖の罪過を償ふて、尙大に餘りありと評するに至つた、墓石一基、青苔滑かなる前に立つて、偉人を偲べば彼は何事をか語るが如く見ゆるであらう。

大船より三哩五にして戸塚驛である、此處は鎌倉郡の東端にある町にして人口約四千、郡役所、警察署等がある、之より幾何もなくして武藏國である。

## 16、武藏國

程ヶ谷驛…帷子の里…平沼驛…神奈川驛…人馬絡繹…車馬雜鬧…唯  
 奮闘あるのみ…神奈川町…小机の城址…鶴見驛…生麥の碑…川崎驛  
 …川崎の大師堂…小向の梅林…矢口の渡し…新田義興…新田氏の一族を悲しむ…山陽の評…十騎社…蒲田驛…蒲田梅園…穴守稻荷…蒲田運動場…大森驛…八景園…本門寺…日蓮上人…洗足の地…品川驛  
 …東京市の南門…南品川北品川…品川の臺場…御殿山…東海寺…海

晏寺…名士の墳墓…鈴ヶ森…新橋驛…十四州の山河…如今半は墮つ恍惚の中…地理と歴史…我が遺骨を托する地…人類の活動を永遠に傳うる歴史

武藏國 橋 郡 程ヶ谷驛、政治上の管轄區域は神奈川縣である、人口約六千、昔は帷子の里と稱し鎌倉、金澤地方への要路であつた、横濱は東方約一里、汽車を以てすれば五分である、之より平沼驛を経て次は神奈川驛である、白雲、峰を遶る山を望み、烟波浩蕩たる海を眺めて大いに美感を養つて來た眼も、最早此の地方に來ては忽ちにして東奔西走の忙はしき活動の天地に注がねばならぬ、耳に聞ゆるものは琴の如き松風のしらべ、鼓の如き谷川の流の音にあらずして、軋轆たる車馬の音、騒然たる汽車電車の響、煙突は四方に聳えて濛々たる黒煙を降らし、生存競争の舞臺に果し眼になつて奮闘して居る人々を見る、二十世紀の多忙なる今日に生れた我々は、其

の如何なる場所、如何なる境遇たるを問はず、活力を奮ひ起して大ひに奮闘せねばならぬ。

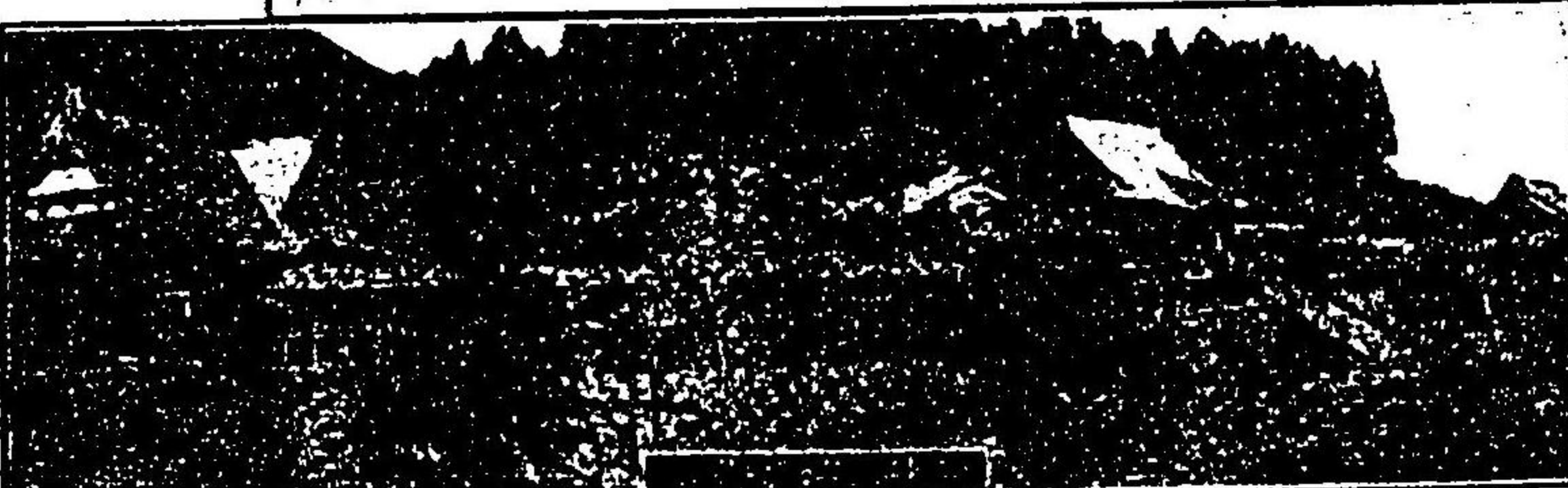
神奈川は、日本の門戸にして且つ世界の市場たる横濱の町続きである、京濱電車は東京より來り、此の地に於て横濱電車と接続して居る、五十餘年前横濱が寒烟蕭條たる一漁村の時に於て此の地は既に外交の談判地であつた、町の背後なる一帯の丘陵を高島山と呼び、公園あり、神社佛閣あり、眺望も亦佳である、町の西約半里には豊顯寺の櫻と稱して古來名高き名木がある、春の頃杖を曳く人が多い、又西北約一里半、小机村には小机の城址がある、天文年間北條氏綱の修築する處である。

神奈川よりやがて鶴見驛に着いた、並木の松は往時に於ける東海道の面影を幽かにこゝめ、生麥の碑は其の文、中村敬宇の撰にかゝり、文久二年、薩州侯の前驅を横ぎつて無禮撃ちにせられし、英人リチャドソンを弔ふもの

(相模) 片瀬の渡場



(甲斐) 身延山久遠寺



(相模) 片瀬より江の島を望む





雲、片瀬の渡場 松林疎々、軟沙白く海邊に連り、江の島は給の如く海上に浮べり。

うつくしきくらげ浮きたり春の海

正岡子規

西、片瀬より江の島を望む

江の島や薰風魚の新しき

正岡子規

西、身延山久遠寺 山梨縣南巨摩郡身延村にあり、日蓮宗の總本山なり、甲府の南九里にして遠すべし、奥の院は木堂より更に一里半、眼界廣闊なり、日蓮嘗つて此の峯に躋りて、遙かに故國安房の方を望み、父母の墓を念ずること切なり、之れ絶續なる祖師堂を思親閣と稱する所以なりとす。

である。

鶴見驛を發して川崎驛に着く、人口約七千、街衢繁盛、商業盛である、名高き川崎の大師堂は、金剛山平間寺と號する巨刹にして、大治年間今を距る約七百八十餘年前、此の浦の漁夫平間兼豊父子の創建するところと傳へられる、堂内には弘法大師の像を安置し結構頗る宏壯である、境内は風致清麗なる公園にして泉水あり、梅林あり、茶亭あり、其の緣日に當つては東京、横濱其他近郷よりの參賽者雲集雜沓して非常なる盛況を呈する、又當町の西北約二十町餘に小向の梅林がある、六郷川(多摩川)迂曲緩流して地域閑雅なる邊り、梅樹嵯峨として點綴し、風景優雅である。新田義興が奸賊の計にかゝつて舟中に割腹せる矢口の渡は、之れより北數町の處にして府社新田神社は即ち義興を祀れるものである。義興は義貞の第二子金ヶ崎城に於て討死せる義顯には弟である、幼名を徳

壽丸と言ひ、官は左兵衛佐であつた、延元三年、義良親王を奉じて東國を略し、父の志を繼いで義兵を擧げ、以て足利氏を滅さんと海路東國に航したが、途上颶風に遇つて諸軍相散じ、空しく僻落に匿れた、然るに正平七年従弟脇屋義治と共に兵を起し、鎌倉を攻めて當時鎌倉に居た尊氏を走らした、然るに同年十月、畠山國清の臣竹澤良衡なる者に欺かれて、此の矢口の渡に於て非業の死を遂げた、實に千歳の恨事である、新田氏の子孫及び一族は南朝の爲めに盡く義に死した、頼山陽は其の著日本外史に見る其報國之志百敗不挫 至今凛有生氣 而老賊之骨朽腐已久 十三世之室町徒見市塵迷離 索其斷礎一不復可識矣

と書いてあるが、其の言の正に當れるを深く感じた、新田神社は始め土民が義興の靈を慰めんが爲めに建てたるものと稱し、今は府社に列せられて

ある、又村内に十騎社といふ一祠があつて、之れは當時義興と共に斃れた従者を祀つてある。

川崎を發して上ること二哩二にして蒲田驛に着いた、此處は東京府下荏原郡に屬し、近傍に東京市外南郊の一名所たる蒲田梅園がある、又之れより東、羽田村字鈴木新田には穴守稻荷社がある、社前は恰も赤鳥居のトンネルにして而かも數町に亘り、之れに續いて茶亭道を挟んで頗る賑かである、社の背後には狐穴と稱するものがある、東京より參養する者が頗る多い、之れより數町なる江戸見崎には所謂蒲田運動場が設けられ、此處より船に依つて或は川崎へ、或は大森に行くことが出来る、此の地方は梨、桃等果物の栽培盛である、之れより幾何もなくして大森驛、此處は府下荏原郡の都會にして人口約一萬三千、北は海に面して海水浴場の設備もあり、又停車場の西隣木原山に接して所謂大森の八景園がある、梅樹數百株を植る丘

上に上れば品川灣、房總の山々、皆一望の下に賞するを得て展望頗る壯美である、東京の市民は数日の勞を郊外に忘れんとして杖を曳く者が多い。又有名なる法華宗の巨刹、池上本門寺は停車場より西南約二十町餘の處にある、弘安五年池上宗仲の創建にかゝり日蓮上人入寂の地である、寺は長榮山大國院と號し、甲斐の身延山、上總の正中山、及び此の寺を以て法華宗の三頭と稱し、境内頗る廣く、多寶塔は日蓮の遺骸を茶毘にしたる所、眞骨堂は其の遺骨を納むる所、其の外日朗、日輪の廟、池上宗仲夫妻の墓、徳川頼宣の墓、徳川吉宗の母堂及び夫人の墓、狩野探幽の墓、星亨の墓等がある、毎年十月十二日及び十三日の兩日に於ける會式は有名なるものにして、法華宗の信者、賓客、或は太鼓を叩き、或は萬燈を押し立て、雲集し、其の盛況實に塔堂伽藍も將さに揺り崩れんばかりである。

日蓮は實に當時我が國宗教界に於ける傑物であつた、其の牢乎たる意志、

稜々たる氣骨、凜然たる勇氣、皆これ彼が宗教的信念の發揮である、彼れ幼名は藥王麻呂、閑院冬嗣の後裔にして姓は三國、父は貫名左衛門重忠、母は清原氏、日光胸上に耀くと夢みて孕み、貞應元年二月十五日、安房國長狹郡敢川村の誦所に彼れを生んだ、十八歳にして剃髮受戒し、眞言を學び禪律密法を修めた、初めは是成坊と號せしが後蓮長と稱し、更らに又日蓮と改め吉田兼益に隨て神道をも學んだ、就中彼れは心を潛めて法華經を修め、遂に安心立命の途是に存すこ爲し、建長五年四月廿八日、旭日に對して『南無妙法蓮華經』七字の題目を誦し、始めて法華宗を開いた、文應元年七月安國論一卷を著して諸宗を論難排斥し、之を時の執權北條時頼に上るや捕へられて伊豆の伊東に流され、後三年赦されて鎌倉に歸る事を得た、併し彼は之れを以て更に意となさず、一層口を極めて諸宗及碩學の浮華繁縟を罵倒した、是を以て再び捕へられて弟子日朗と共に土牢に幽せ

られ、文永八年將きに龍の口に於て斬らねんとしたが、時頼の子相摸太郎時宗父の怒を宥めて、死一等を減じて佐渡に流し、纒に其死を免れしめた。斯の如く迫害萬難交々至るをも顧す、所信を論じて止まなかつた、其の勇氣たるや實に峻嚴であつた、後赦されて歸り甲斐に行きて身延山を開き、元寇動亂の餘勢未だ靜がならざる弘安五年十月十三日、此の池上宗仲寺に於て寂した。

彼も亦實に一代の偉傑であつた、口蓮の入寂せんとするや『我は日本一の富者ならん』と言つた、本門寺の殿堂が揺れ崩れんばかりのお會式も亦宜べなりと言ふべきである。

本門寺より西北約一里餘に當つて洗足ノ池と稱するものがある、池畔風趣幽邃にして附近に幕末の偉人勝海舟翁の墓がある。

大森驛より一哩九、僅か三分にして品川驛に着いた、此處は荏原郡の首都

東京市の南門、昔江戸日本橋を出發して東海道五十三次の第一驛であつた人口約二萬一千餘、北は東京芝高輪より接續して殆ど東京市中の觀がある、荏原郡役所は此處に置かれ、町の中央なる中ノ橋より南を南品川、北を北品川と汎稱し、軒を連ねたる妓樓に昔東海道驛次の名残を留めて居る、町中には南の天王と稱する荏原神社、北の天王と稱する品川神社がある、又前面の海中には安政年間、幕府が外國船の渡來に狼狽し、品川御殿山の土を崩して築きたる臺場今尙當時の滑稽なる歴史を語るが如く残つて居る、御殿山は往時櫻の名所として飛鳥山と並び稱されたる所であるが、今は其の舊景を失つて唯名のみである。

東海寺は澤庵和尚、寛永十四年の開基にして禪宗臨濟派に屬し、開基澤庵の墓、國學者加茂真淵の墓、京都の儒者服部南郭の墓等がある、又海安寺は町の南端にあつて曹洞宗に屬し、北條時頼の創建、僧道隆の開基、慶長

元年慶有和尚の中興にして古來紅葉を以て著はれ、寺の後一堆の丘阜には楓樹多く植ゑられ眺賜も亦美である、本堂は曾て火災の爲めに焼失し、今は假堂を有するのみなれども、塋域には、岩倉具視公、松平春嶽公等近世名士の墳墓がある、是れより南數十町にして入新井村には昔、江戸幕府時代の刑場、鈴ヶ森がある、今は巨石の無縁塔を建て、僅かに、其の舊址たるを知るのみであるが、昔は松杉陰暗き所、首臺の上には蒼白にして其上に血のにじみたる罪人の首が梟せられ、行人をして肌粟を生せしめた處であるが、今は開かれて旗亭別荘等續々として建てられてある。

水清く石白き多摩川の畔を出發してより、三週日餘にして再び電燈、瓦斯燈の爛々として輝く帝都の人となつた。

小石川の片ほとりなる寸燐箱の如き假寓に、旅装を解いて冥想回顧すれば、甲信の山々、北海の波濤、東海の色、我が觀念界に残る十四州の山河は、

或は起伏蜿々として、或は烟波浩蕩として、直ちに我が指呼に應せんとして居る、浪は巨巖を蹴つて白沫を半空に飛ばす北越の海よ!! 天は無盡に浮んで青泥濘たる東海の濱よ!! これより後は微渺蕭然たる紅葩の夢昧に入りて、虛室偶々餘閑ある時に思ひ出さしめよ!!

久太郎先生の詩に曰はく

肥山雲霧薩海風 回首游蹤總雪鴻  
當時每思向君語 如今半墮恍惚中

紅葩は十四州の山河が與へたる幾多の美はしき感想の半を途上恍惚の中に失つた、されど悠々として連れる山河の趣と、惻々として感慨に堪えざる興亡古今の跡とは、深く紅葩の魯鈍なる頭に印象を與へた、世の經綸と政治とに志し、社會を感化教導せんとする者は、宜しく地理と、歴史との堅き基礎に立て、松蔭先生曰はく

『地を離れて人なし、人を離れて事なし故に事を成さんと欲する者は當に地理を究むべし』

と宜べなり地理なしの政治、歴史なしの經綸は實に危険である。

此の地に生を享け、此の地に育ち、此の地の水を飲み、此の地に産する物を食ひ、此の地に愛し、愛せられ、遂に此の地に我が死骸を遺して去る、と内村鑑三の地人論にあるが、實に我等は祖先の骨を埋めたる此の地、而して我が骨を托すべき此の地を研究することは、應さに努むべく努めざるべからざる事である。

昔、西行法師が西國行脚の砌、讃岐の國に至り、崇徳院のかくれさせ給ひし御陵に詣で古き詩を思ひ出で、

『松樹千年終是朽 槿花一日自爲榮』

と詠じつ、暫らく此處に候ひけれ共法華三昧つとむる住持の僧もなく

焼香散華を奉る參詣の者もなかりけり』

と、源平盛衰記にあるが『松樹千年にして終に是れ朽つ、槿花一日自ら榮と爲す』善いかな言やである、併し我々の汚き慾心は千年も生きるものならば、終に朽ちても敢て遺憾とする所ではないと思ふが、悲しいかな、無窮に悠々たる天壤に比ぶれば、槿花一日の命である、信長が大長刀執つて歌つた通り『人間五十年、下天のうちにくらぶれば、ゆめ幻の如くなり』である、然るに此の槿花一日の命、ゆめ幻の如き命が實に尊いのである、されば我々は努めねばならぬ、活動せねばならぬ、吾人の生命は、大いなる事業を就さんが爲めに供せられたる小さき假の宿なるを悟つたならば、此の小さき假の宿、あさがほの露のひぬ間の生命を大いに光榮として世の爲め、人の爲めに大いに奮闘努力せねばならぬ。

十四州の山河是に於てか、一大活力を紅葩に與へた。

山 河 拾 四 州 終

蒼海あゐうみの眞中まなか巖いわヶ根ね組ぐみみ  
海うみよりは強つよき力ちからをうけ

御國みくに作りし大和男やまとのおとこの子  
山やまよりは高たかき心こころを得えたり

(金 崎 賢)

刷 印 日 大 十 月 二 年 五 十 四 治 明  
行 發 日 三 月 二 年 五 十 四 同

(錢 拾 六 金 價 實)

州 四 拾 河 山 教 通 育 俗



著 作 者 玉 井 廣 平

發 行 者 和 田 靜 子  
東 京 市 日 本 橋 區 通 四 丁 目 五 番 地

印 刷 者 西 原 重 暉  
東 京 市 麹 町 區 內 幸 町 一 丁 目 四 番 地

印 刷 所 白 川 印 刷 所  
東 京 市 京 橋 區 長 澤 町 十 六 番 地

發 行 所 春 陽 堂  
東 京 市 日 本 橋 區 通 四 丁 目 角

電 話 本 局 五 十 一 番  
振 替 口 座 東 京 一 六 一 七

332  
229

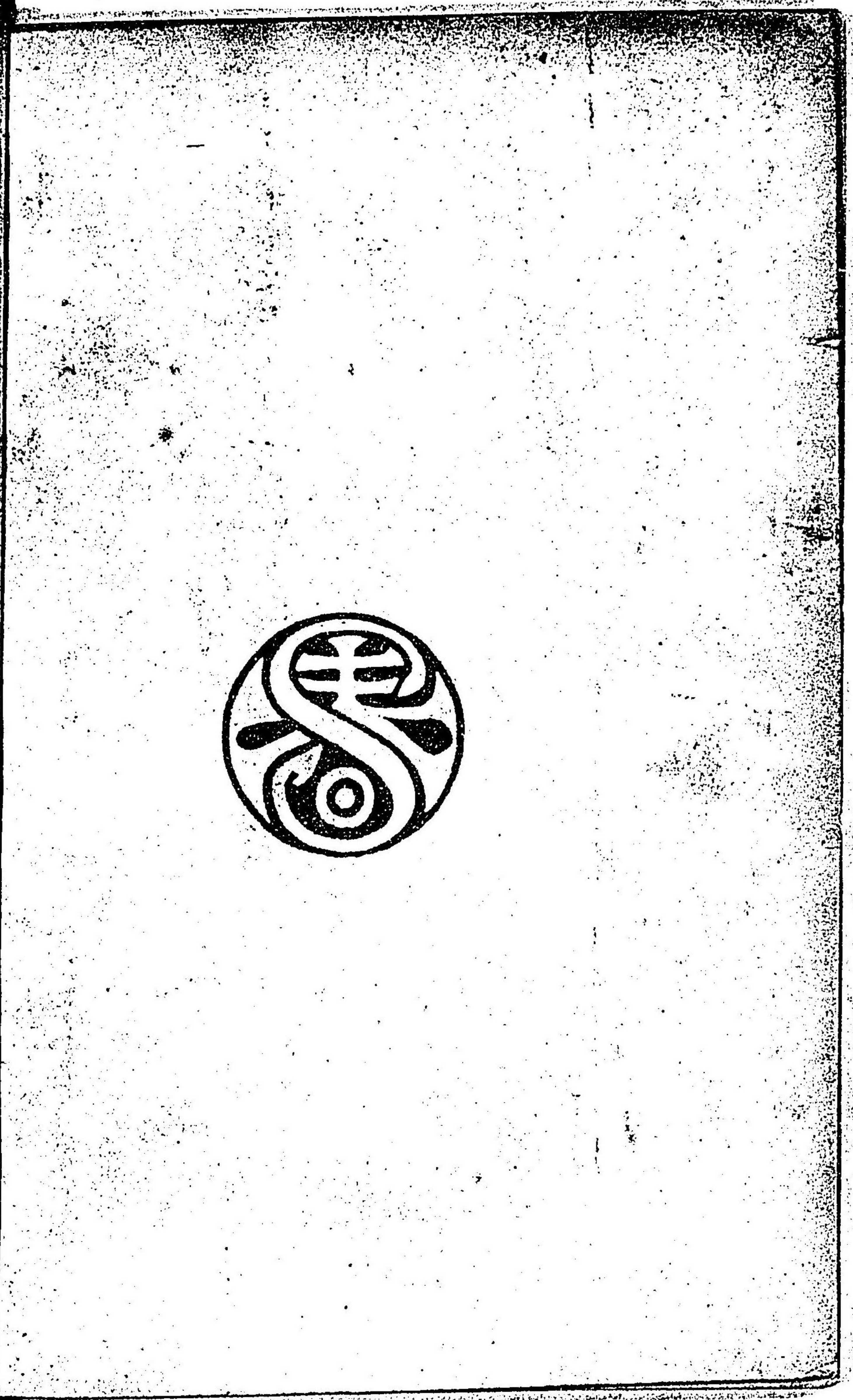
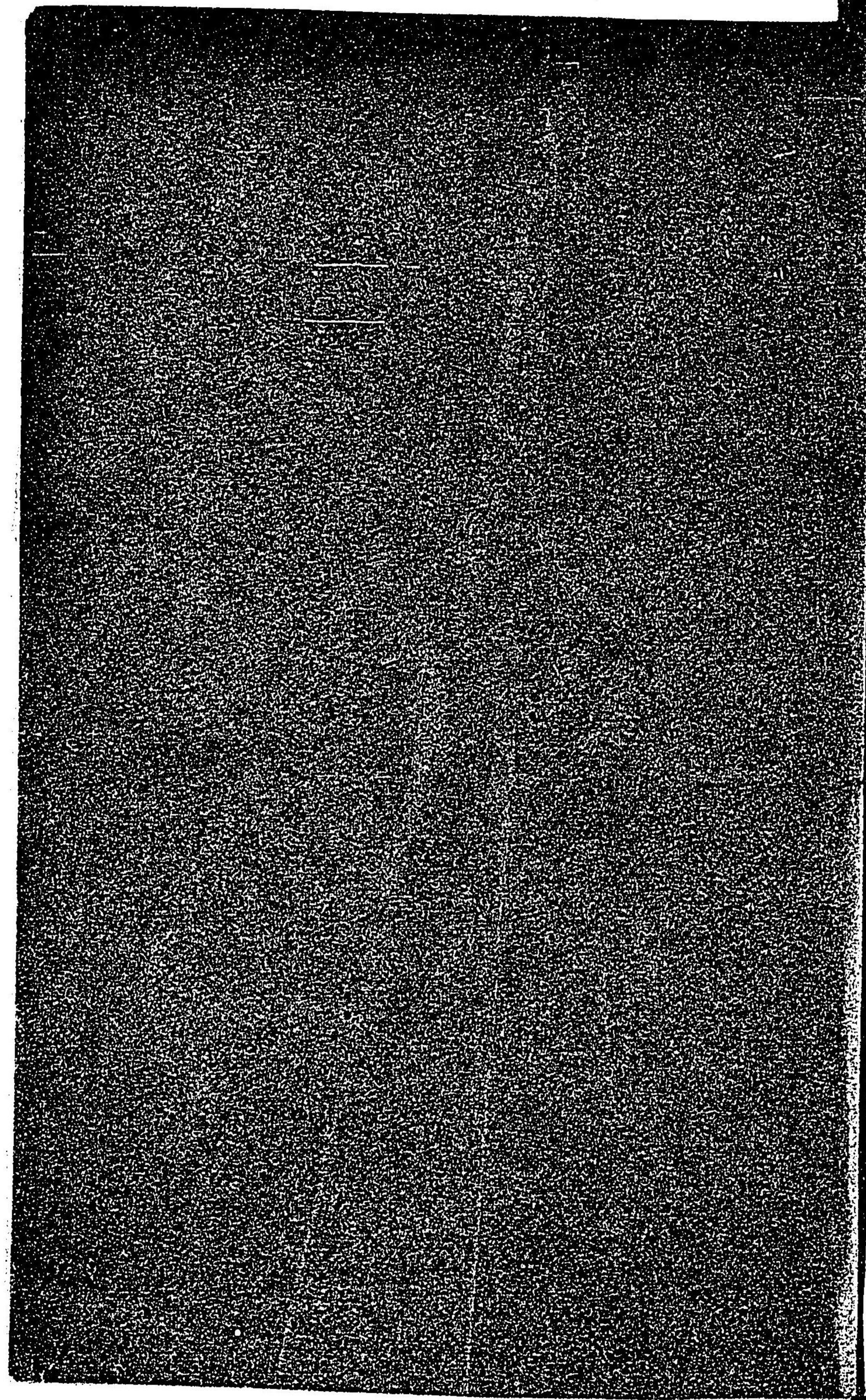
■ 近刊豫告 ■

山河六十餘州 (畿内之部)  
中國之部

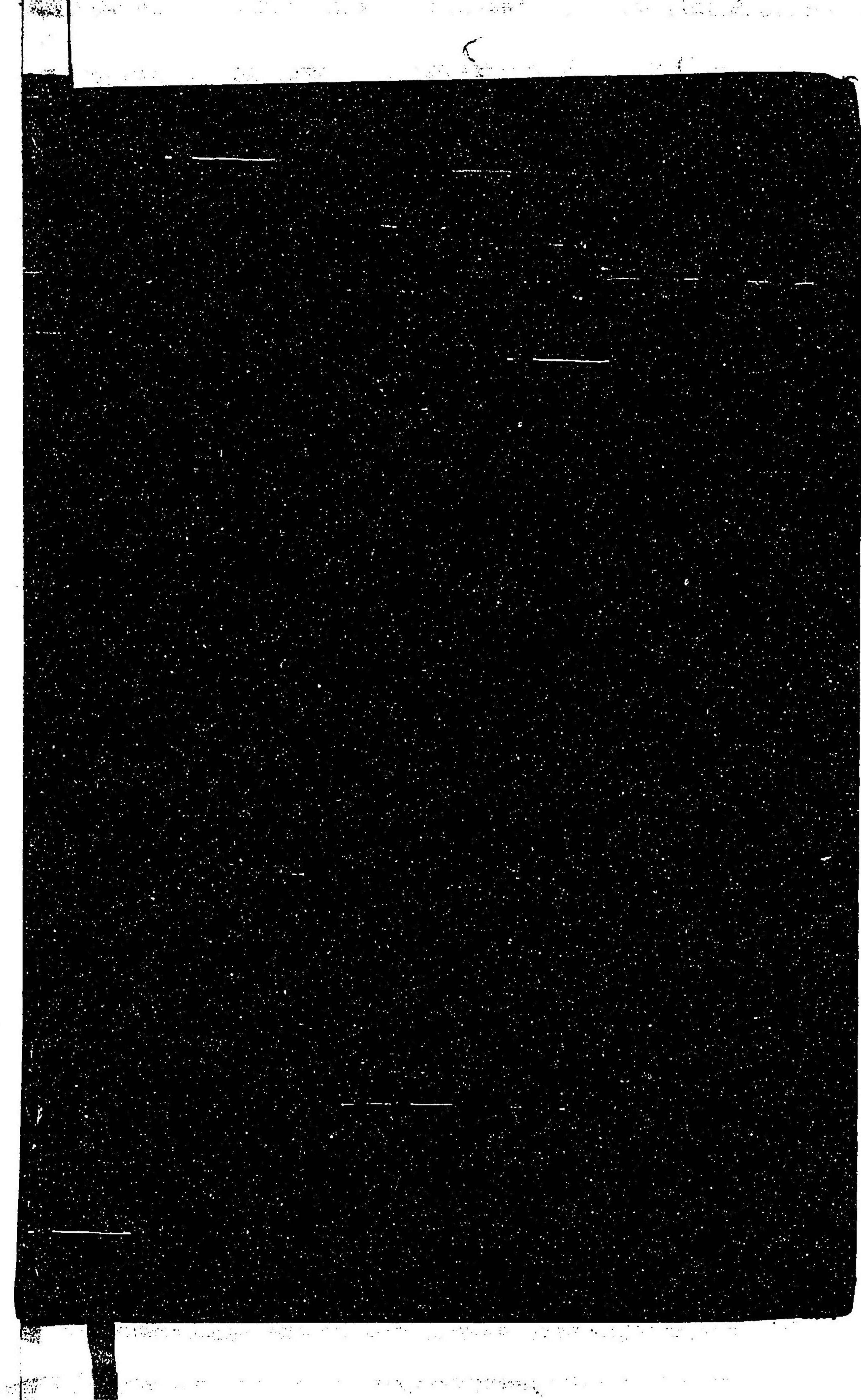
目次

- 一、中京を出發して伊勢の大廟に參拜す。
- 二、伊勢より伊賀の拓植江州の草津を経て京都に到る。
- 三、奈良の舊都に荒廢の跡を尋ねて紀州和歌山に到る。
- 四、和歌山より泉州の堺を経て大阪に入る。
- 五、大阪を西下して長門の國下の關に到る。





1334  
229



632  
229

022481-000-2

332-229

山河拾四州(通俗教育)

玉井 紅葩(広平) / 著

M45

ADB-0147



